

俺様御曹司は花嫁を逃がさない

東京にある昔ながらの商業地域に、「フローリスト・セリザワ」という小さな花屋がある。

最寄り駅から徒歩三分の距離にあるその店は、築四十八年の七階建てビルの一階にあり、広さは二十平方メートル弱。

オープン以来、二十年に渡り地元の人達から親しまれ、季節の花を中心に観葉植物や鉢植え、その他植物に関するグッズなどを販売している。

花屋の四季は世間よりも一、二カ月早い。二月も中旬に差し掛かった今、店先にはもうチューリップやヒヤシンスといった春の花が並び始めていた。

「澄香、お母さん、ちよつと配達に行くつてくるから、店番お願い」  
母親の葉子が、店のバックヤードからひよっこりと顔を出した。

「了解。気をつけていつてらっしゃい」

「はい、いつてきます」

店の横にある駐車場へは、レジの奥にある通路から行く事ができる。

澄香はコデマリの入った花桶を持ち上げると、店の入り口横のスペースに置いた。

今日は朝から天気が良く、二月とは思えないほどのぽかぽか陽気だ。それからすぐにやって来た常連の女性客と挨拶を交わし、そのまま店先で立ち話が始まる。

「澄香ちゃん、三日後のバレンタインデーに、お花のアレンジメントを頼みたいんだけど」

「毎度ありがとうございます。どんな感じのアレンジメントにしましょうか」

「アレンジメントの中に、このくらいのチョコの箱を仕込みたいんだけど、できる？」

女性客が親指と人差し指で輪を作った。

「できますよ。お花とか色の指定はありませんか？」

「特にないけど、バレンタインデーっぽくて、シックで可愛い感じのやつがいいな。予算は、四千円くらいで」

「了解です。いいですね、旦那さまとラブラブで」

澄香は、女性客に軽く体当たりをした。

「やだもう！ って、まあそうなんだけどね。澄香ちゃんは、彼氏とかいるの？」

ストレートに聞かれて、澄香は肩をすくめながら首を横に振った。

「それが、さっぱり見つからなくて」

「あらそう？ まあ、これもご縁だからね。じゃあ、十四日の夕方に取りに来るね」

上機嫌で去っていく女性客を見送ったあと、澄香は大きく背伸びをした。

（彼氏ねえ……。できる気配もなければ、そもそも男の人と出会えうきつけかかってゼロだもんね）

芹澤澄香、二十八歳。

小学生の頃から母親が経営する「フローリスト・セリザワ」に出入りし、高校卒業後は本格的に店を手伝い始めた。

明るい性格で、いつも笑顔でいる澄香は、今や近所でも評判の看板娘だ。

やや小柄ながら、日々ずつしりと重い鉢や花筒を運んでいるおかげで、体力には自信がある。

和風の顔立ちは、美人とはいえないものの愛嬌があるとされるし、誰にでも気さくに接するから、男女問わず知り合いは多い。

おしゃれに興味がないわけではないが、女子力は控えめで、洋服は動きやすさ重視。

肩までのくせつ毛は、ヘアゴムでひとつ括りにするか、バレッタで留めていた。

そんな澄香には、いまだかつて「恋人」と呼べる男性がいた事がない。大勢の男女と親しく話したり、飲み会などで偶然隣り合わせた男性と喋ったりする事はあるが、いつも「友達」止まりで、それ以上の関係になる事はなかった。

社会人になってからは特に、休みの日のズレや仕事の忙しさもあり、男友達と会う機会ほとんどなくなった。

職業柄人と接する機会が多いけれど、女性客のほうが多いし、たまに来る男性客は彼女がいたり妻帯者だったりが多いのだ。

時折人恋しく思う事はあるものの、どうしても恋人がほしいというわけでもない。

たまには、おしゃれしてデートに出かけたいと思ったりもするが、なんだかんだで結局は日々、フローリスト用のエプロンを着けて店の中に留まっている。

(縁があれば、そのうち素敵な王子様に巡り合えるのかな)

そんな事を思いながら、澄香は店に入り、たつた今注文を受けたアレンジメントのデザインを考え始める。

(シックで可愛くて、バレンタインデーっぽいやつか……)

花束やアレンジメントを注文される時、具体的な指示をしてくれる人もいれば、今のように抽象的なイメージだけを伝えて、あとはお任せという人もいる。いずれの時も作る側のセンスが問われるし、プレゼントとなると責任は重大だ。

(旦那さま、たまにお見かけするけど、結構恰幅のいい方だったよね。眼鏡をかけてて、奥さまよりちょっとだけ背が低くて——)

プレゼント用の花を用意する時、澄香はできる限り贈られる人の好みやイメージを聞いて作るようにしている。むろん、お客さまが急いでいる時は、時間をかけたリサーチはできない。

けれど、せっかく花を贈るといふ特別な行為をするのだから、その瞬間を思い出深いものにしたと思う。

澄香は女性客のパートナーのイメージを頭の中で膨らませながら、キャッシャーの上に置かれているメモ用紙に手を伸ばした。

その上に思い浮かんだデザインを描き、花の名前と色をメモしていく。

バレンタインデーには、この他にも花束やアレンジメントの注文を四点受けており、そのうちのひとつは片想いをしている男性に渡すものであるらしい。

自分が作った花束が、重大な告白の場に立ち会うのだ。

そう思うと、ちょっとだけ胸がドキドキしてくる。

澄香は目を閉じて、花束を渡すシーンを想像しながら両手を前に差し出した。

「好きです！ これ、私の気持ちです。〇〇くんのために、私が想いを込めて用意したチョコレートと花束、受け取ってくださいっ！ なぁんて言っちゃったりするのかなあ——」

ひとしきり告白の甘酸っぱさを味わって目を開けると、目の前にスーツ姿の男性が立っていた。

彼は怪訝(けげん)そうな表情を浮かべながら、澄香の顔と差し出したままの両手を見比べている。

その顔は、びつくりするほど美形だ。

「わわっ……す、すみません！ い、いらっしやいませ！」

澄香はあわてて手を引つ込めると、男性に軽く頭を下げた。彼は、無言のまま澄香から視線を外し、店の中に目をやる。

その顎のラインが完璧すぎるし、立ち姿はモデルのように美しい。それに加えて、店内にある花をぜんぶ自身の背景にしてしまったかのようなゴージャスな存在感がある。

彼は、ひとしきり店内を見回すと、澄香に視線を戻した。

「花束を作ってほしいんだが、すぐにできるか？」

「はい、もちろんです。プレゼントですか？」

「母への誕生日プレゼントだ」

男性が、淡々とした口調でそう言った。そっけない態度からは、母親の誕生日を祝う喜びなど一

切感じられない。

しかし、わざわざこうして花屋に足を運ぶ手間暇をかけているのだ。そういった男性客の多くは、花を贈る事への照れくささを感じており、わざとそんな態度をとってしまう人が少なくない。

「そうですか。おめでとうございます。お母さまが好きな花や色は、ありますか？」

「さあ……よくわからないな」

男性が、眉間に微かな縦皺を寄せた。

「では、どんな雰囲気の方なのか、教えていただいてもよろしいでしょうか？」

「雰囲気？」

「はい。華やかだとか、可愛らしいとか、優しいとか——お客さまの、お母さまに対するイメージを伺って、できる限りお母さまにふさわしい花束を作らせていただきますので」

「派手で高そうに見える花束ならなんでもいい」

男性が、澄香の言葉を遮るようにそう言った。その口調は、ぞんざいでぶっきらぼうだったが、その割に店内の花をまじまじと見つめたり、ソワソワとスラックスのポケットに手を突っ込んだりしている。

（ははーん。さては、こう見えて実はシャイボーイって感じかな？）

そう思った澄香は、花束を作るべく店の壁際に置かれたフラワーショーケースの前に移動した。

「承知しました。誕生日に息子さんから花束をプレゼントされるなんて、お母さまは喜ばれるでしょうね。お客さまも、お母さまの喜んだ顔が見たいですよね？」

澄香がニコニコ顔でそう訊ねると、男性は眉間の皺をさらに深くしながら片方の眉尻を上げた。「花を贈るのは毎年恒例の儀礼的なものだ。喜ぶとかそういうのはないな」

男性は、そう話しながら渋い顔をする。しかし、その視線は澄香がどんな花を手にするのか気になっっている様子だ。

なるほど。儀礼的であれ、毎年花を贈っているのだ。察するに、彼は愛情表現が、あまり得意ではないのかもしれない。

澄香は男性の顔をじっと見つめた。目が合った途端、男性が澄香から顔を背ける。「予算に上限はない。とにかく見栄えがよくて、ゴージャスな花束を作ってくれ」

ああ、やつぱり。

澄香は心の中で、深く頷いた。

伊達に長年に渡り「フローリスト・セリザワ」の看板娘をやっているわけではない。

この人は、おそらく本当の心とは裏腹に、わざとぞんざいな態度をとるタイプの人だ。

そう気づいたからには、もう少しリサーチして彼が贈ってよかったと思うような花束を作りたいと思う。

「かしこまりました。ちなみに、普段お母さまはどんなファッションをしていますか？」

「仕事をしているから、普段はほとんどスーツだな」

「そうですか。プライベートでも、きっちりした洋服が多いんでしょうか？」

「いや、家では割とゆったりした服か、着物を着ている」

「わあ、普段お着物をお召しなんです。素敵です。ご自宅のインテリアなんかにも気を遣っているんじゃないですか？」

「どうかな。自宅でも仕事をするから、自室は、いたってシンプルで機能的だ」

「仕事熱心な方なんです。きっと、洗練されたキャリアウーマンでいらっしゃるんでしょね」

「確かに仕事は人の何倍もできるな。いつも忙しくしているし、外見はともかく中身は男みたいなんだ」

澄香は深く頷きながら、頭の中で男性客の母親のイメージを作り上げていく。

「なるほどです。とても粋でスタイリッシュな方なんです」

男性が、ふつと鼻で笑う。

「それはどうかな。母はデスクに黄色いひよこの形をした時計を置いている。スタイリッシュな人間は、部屋にそぐわないものを置いたりしないだろう」

男性が、独り言のようにそう言った。

ほらほら。そっけない関係を装っている割には、細かなところまでちゃんと見ている。

こうなったら、男性の素直に出せない気持ちをも、目一杯花束に込めてあげようと思う。

「ひよこの形をした時計ですか。女性って、どんなにかっこよくてスタイリッシュな方でも、どこかしらに可愛さを秘めていたりするんですよ。もしかして、お母さまもそんな感じですか？」

話しながら、フラワーショーケースを開けて黄色い薔薇を三本手に取る。

「いや、可愛さとはほど遠い人だ」

「お母さまは、デスクワーク中心のお仕事をなさっているんですか？」

自然な形でリサーチを進めつつ、澄香はオレンジ色のガーベラとランタンキュラス、黄色のフリージアを花桶から取り出す。

それに紫陽花に似た緑色のビバーナムと、ゴッドセフィアナという白い斑点のある葉を足した。束ねた花を眺め、ふと思いついてミモザの花を加える。

「最近はどうだが、本来は自ら動き回るのが好きな仕事人間だから、しょっちゅう出歩いている」

「お忙しい方なんです」

「超多忙だ。だけど、そうしているのが好きな人だし、暇だと逆に具合が悪くなるタイプだと思っ」

「アクティブなお母さまなんです」

「いい年をしてアクティブすぎるくらいだ。いい加減、立ち止まって休めばいいのに。……なんて俺が言っても聞くような人じゃないがな」

男性が誰に言うともなくそう零した顔に、一瞬影が差したような気がした。

澄香は、それを気に留めながらも、形を整えた花の茎をしっかりと紐で括る。きちんと保水したあと、オレンジイエローのラッピング用紙で丁寧に包んだ。

出来上がった花束は丸い形のラウンドブーケで、全体的に元気で可愛らしいものに仕上がっている。そんなお母さまを、ちゃんと理解して大切に思っているお客様の気持ちが、花束を通して

て伝わると思いますね——はい、お待たせいたしました。こちらでいかがでしょうか」

澄香は、にっこりと微笑みながら男性に花束を差し出した。

「今、お話を伺いながら、私なりにお客さまのお母さまをイメージして作ってみました」

澄香が男性に花束を差し出すと、彼は意外そうな表情を浮かべた。

「これが、俺の母親をイメージして作った花束？」

思っていたのと違う——男性の顔には、はつきりとそう書いてあった。

だが、ここからがフローリストとしての腕の見せどころだろう。

「はい、そうです。伺ったお話から、お母さまはバリバリのキャリアウーマンという印象を受けました。でも同時に、お客さまからは、お母さまを心の底から大事に思う気持ちや、はつらつとした可愛らしいイメージも伝わってきたんです」

男性が、花束から澄香に視線を移した。

「やけに小さいし、そんなに高そうな花も入ってなさそうだが？」

「五千円で作らせていただきました。もちろん、お客さまの、お母さまを思う気持ちは値段とは関係なく上限なしのプライスレスですけどね」

澄香は、男性に半歩近づいて、にっこりと笑った。

「さあ、どうぞ！ これをお客さまの笑顔と一緒にお渡ししたら、喜ばれる事間違いなしです！」  
男性が、澄香の勢いに圧されるように身体を仰け反らせる。彼の眉間には、今や深い縦皺が、くつきりと刻まれていた。

「……ふん、まあいい。支払いはこれで」

男性は、澄香の顔をジロリと見たあと、スーツの内ポケットから黒色のカードを取り出した。

「あ……申し訳ありません。うち、カードは使えないんです」

「は？ 今時カードが使えない店なんてあるのか？」

彼はブツブツと文句を言いながらカードをしまうと、マネークリップに挟んであった一万円札をキャッシュャー台の上に置いた。そして、すぐに澄香に背を向けて入り口に向かって歩き出す。

「お待ちください。今、お釣りを——」

澄香は急いでレジを開けて五千円札を取り出した。

「釣りはいい」

「ですが——」

「いいったら、いいんだ」

男性は、面倒くさそうにそう言い捨てると、大股で店の入り口を通り過ぎていく。

澄香は、そのあとを追って店の外に出た。

てつきり店から遠ざかっているものと思っていた彼は、なぜか入り口のすぐ横にしゃがみ込んでいた。

「わっ！」

あやうく男性の尻を蹴飛ばしそうになったが、なんとか踏みとどまった。

見ると、男性の前に大人しそうな中型犬がいる。

「あ、ワンちゃん。お客さまの犬ですか？」

「どうやら彼は、店の立て看板の支柱にその犬を繫いだ紐を括りつけていたみたいだ。」

男性は花束を持った手で苦心して紐を解くと、澄香のすぐ横にすくと立ち上がった。

「捨て犬だ。駅の近くにある劇場の近くで見つけた。なぜか懐かれて、どうしても離れないんだ。仕方なく面倒を見る事になって、かれこれ三カ月近くなるな」

男性は、そう言つて澄香を上から見下ろしてきた。澄香も彼を見つめ返し、にっこりと微笑みを浮かべる。

改めて見ると、つくづく男前だ。目の高さが澄香より三十センチ以上高い位置にあるから、身長は百九十センチ近くあるのだろう。

店で花をバックに立っていた彼は、まるで漫画に出てくるヒーローみたいだった。そして今、なんでもない町の風景の中にいる彼も、雑誌の表紙を飾れるくらい絵になっている。

澄香は怖がらせないよう気をつけながら、犬の斜め前にゆっくりとしゃがみ込んだ。犬は、右耳の先端が黒く、その他は全体的に薄い茶の毛色をしている。

「そうなんですか……犬つて人を見ますから、きつとお客さまが優しい人だつてわかつたんでしょね。……よしよし、いい人に拾われてよかつたね」

澄香が犬の頭を撫でながら男性を見上げると、彼は優しい目で犬を見ていた。しかし、澄香と目が合った途端、渋い顔をしてそっぽを向く。

「俺が優しいって？ ふん……そんなふうに言われたのは、はじめてだ。ほら、行くぞ！」

男性は、犬を繫いだ紐を自分のほうに強く引き寄せた。けれど、その紐は十分にたわんでおり、引つ張つたところで犬には何のダメージもない。

「お買い上げありがとうございます。ぜひまたお越しくださいね」

澄香は立ち上がり、男性客の胸ポケットに、折りたたんだ五千円札を入れさせてもらった。

男性はムツとした表情を浮かべたものの、プイと横を向いてそのまま犬と一緒に道の向こうへ歩み去っていく。

澄香は犬を連れられた男性のうしろ姿を見送りながら、自分が作つた花束が無事役割を果たすよう、心の中で祈るのだった。

「フローリスト・セリザワ」の営業時間は、午前十時から午後六時まで。定休日は毎週木曜日だが、母の日や敬老の日など、花のニーズが高まる日はその限りではない。

バレンタインデーである今日は、朝から予約客や通りすがりのお客さまで大盛況だ。

母親の葉子が店頭で接客をしているうしろで、澄香は注文を受けた花束やアレンジメント作りにかかりきりになっている。

「こんにちは。お願いしたやつ、できてるかしら？」

先日夫に贈るバレンタインデー用のアレンジメントを注文してくれた女性客が、夕方過ぎに店にやってきました。

「いらっしやいませ。はい、できてますよ」



澄香はキャッシュヤーの横にある作業台の内側から女性客に声をかけた。そして、今まさに出来上がったばかりのアレンジメントを彼女に見せる。

花びらがフリル状になった白薔薇を中心に据えたそれは、周りをユーカーリや斑入りのアイビーで囲んでいる。花束を包んでいるのは凹凸のあるチョココレート色のラッピング用紙で、リボンはシックな紅色を選んだ。

「うわあ、可愛い！ 白薔薇がホワイトチョコみたいね。いかにもバレンタインデーって感じがして、すごくいいわあ！」

女性客が小躍りして喜び、パチパチと手を叩く。

澄香は彼女から小さなチョココレート入りの小箱を受け取り、あらかじめ空けておいたスペースに、それを納めた。

「はい、これで本当に出来上がりです。奥さまの愛情がいっぱい詰まったアレンジメントですね」「ありがとうございます！ ほんと、食べちゃいたいくらい可愛いわあ。いつものように写真に撮って、部屋に飾ったあとはドライフラワーにしようかしら」

そう言いながら女性客が笑顔で帰っていく。そのあとも、澄香は注文の品や店頭に並べるミニブーケなどを作り続ける。

いつもは午後六時で店を閉めるが、今日は一時間延長して営業を続ける予定だ。最寄り駅から歩いて三分という好条件の立地のおかげもあり「フロリスト・セリザワ」は、それなりに安定した売り上げがある。

しかし、店の土地建物は賃貸物件のため、毎月安くない賃貸料が発生していた。

澄香の家族は母の葉子と八つ離れた妹の美咲で、父の聡は今から十五年前に病気で他界した。現在大学二年生の美咲は、家を出て学校近くの寮に住んでいる。

日々どうにか暮らしているが、まだまだ学費がかかるし、奨学金だけでは賄えないものも多い。何かあった時の備えのためにも、もっと売り上げを伸ばしたいところだ。

「澄香、これで素敵なバルーンブーケをお願いします」

葉子が笑顔で、一輪の赤い薔薇を差し出してきた。その向こうには、緊張した面持ちの女の子がいる。たぶん、高校生くらいだろうか。手に小さな紙袋を提げているところを見ると、これから好きな男の子にチョココレートを渡しに行くのだろう。

「はい、今すぐにとびきり素敵なやつを作りますね」

きつと今、女の子は胸がドキドキして落ち着かない気分にいるに違いない。

澄香が彼女に向かってにつこりと笑うと、女の子の口元がほんの少しほころんだ。

バルーン用のビニールを手で引っ張って伸ばし、傷つかないよう紙に包んだ薔薇を中に入れる。

空気入力でバルーンの中にしつかりと空気を送り込んだあと、薔薇の茎に気をつけながら口を縛り、専用のスティックに固定する。

「ラッピング用紙は何色がいいですか？」

澄香が訊ねると、女の子は少し考えたあと「何色が合いますか？」と質問してきた。

「そうですね……やわらかなピンク色も可愛いですし、すっきりとしたブルーで包むと男性も持ち

歩きやすいです。あとは、まっすぐな想いを伝えるって意味で、真っ白なラッピング用紙で包むのも素敵ですよ」

それを聞いた女の子が、ばあつと顔を輝かせた。

「じゃあ、白にします！」

「はい、かしこまりました」

それからすぐに取りかかり、出来上がったものを女の子に渡した。

「あの……『頑張つて！』って言ってもらっていいですか？ お姉さんに励ましてもらったら、なんだかうまくいきそうな気がするんです」

女の子に頼まれて、澄香は大きく頷きながら彼女の目を覗き込んだ。

「頑張つて！ ぜったいにうまくいくって、自分に魔法をかけましょう」

女の子は澄香が見守る中、プレゼントとバールンブーケを持った手で胸元を押さえた。そして、大きく深呼吸をしたあと、澄香を見て顔をほころばせる。

「ありがとうございます。頑張ります！」

女の子が急ぎ足で店の外に出て行き、澄香はまた作業台に戻った。

(いいなあ。一生懸命な気持ちかがガツンと伝わってくるよね)

特別恋人がほしいとは思わなくても、やはりこの時期になると独り身の寂しさが身に染みる。

(だけど、今はまだ無理。美咲が大学を卒業するまでは、仕事に集中して頑張つて稼がないと)

作業を続けながら接客をこなし、気がつけば閉店時刻まであと十分になっていた。用意したバ

ンタインデー用ブーケも完売し、残っているのは今作業台で作っているものだけだ。

(作り始めちゃったけど、あと十分か……。せっかくだし、残ったら家に飾ろうかな)

作っているのは、淡いピンク色の花を集めたミニブーケだ。

定価は五百円。花がたくさんついた一本の枝から分けて作るから、安く作れるしメインの花を変えるだけで、まったく違う印象のブーケが出来上がる。

ランキュラスを中心に、小さめのカーネーションとスイートピーを寄り添わせ、周りにグリーンとしてナズナをあしらってみた。

ナズナといえば、春の七草のひとつであり、別名「ペンペン草」と呼ばれるアブラナ科の植物だ。道端に生えている雑草としてよく知られているが、昨今はナチュラルな雰囲気を出す時に使うグリーンとして使われたりする。

「うん、いい感じ」

出来上がったブーケを照明にかざし、一人悦に入っている。すると、店先にいた葉子が少々あわてた様子で手を振ってきた。

「どうしたの、お母さん」

澄香が声をかけると、葉子の横をすり抜けて、見覚えのある背の高い男性が店の中に入った。

「あっ、犬の人——」

思わず指を差しそうになり、あわてて手を引っ込める。

男性はまっすぐ澄香に近づいてきながら、若干不機嫌そうな表情を浮かべた。

もしかして、クレームを言いに来たのかな……

内心でそう思いながら、澄香はにっこりと笑って男性を迎えた。

「いらつしやいませ。今日は、どのような花をお求めですか？」

土曜日で仕事が休みなのか、今日の彼はシックな黒のコートに同色のカジュアルなパンツを合わせている。

クレームでなければ、彼女に渡すバレンタインデー用の花束を買いに来たのだろうか。どちらにせよ、こちらから決めつけるような事を言ってはならない。

「今日は花を買いに来たんじゃない。先日母に贈った花束の件で聞きたい事があって来た」

やはりクレームだったか……

あの時、男性は「派手で高そうに見える花束ならなんでもいい」と言った。

しかし澄香は、あえて男性から聞き出した彼の母親のイメージに合った花束を作って渡したのだ。素直じゃない彼の母を思う気持ちが花束を通して伝われば——そう思ってしまった事だったが、余計なお世話だったのかもしれない。

「はい、なんなりと——」

「あの花束を母に渡したら、ものすごく喜ばれた。いつもなら礼を言って、取ってつけたような微笑みを浮かべるだけなのに、今回は花束を受け取った途端、本当に嬉しそうな顔をして『ありがとう。嬉しい』と言ったんだ」

男性が、澄香の言葉を遮るよう<sup>さえぎ</sup>にして、そう言った。

「しかも、いつもみたいにすぐ家政婦に渡して花瓶に生けさせず、ニコニコしながらしばらくの間花束を見つめていた。母のあんな顔を見たのは、何十年かぶりだ。一体、あの貧相な花束の、どこがそんなに良かったんだ？」

貧相とは、失礼な。

けれど、とりあえずクレームを言いに来たわけではないとわかり、澄香はホッと胸を撫で下ろした。

「喜んでいただけたようで何よりです。そうですか……実は、あの花束には、いろいろな意味を込めてあったんです」

「いろいろな意味、とは？」

「たとえば、ガーベラとフリージアは二月十一日の誕生花です。花の色や国によっても変わりますが、ガーベラの花言葉は『冒険心』『忍耐』、フリージアは『無邪気』などです。もしかすると、お母さまは、それを知っていて喜ばれたのかもしれないね」

「なるほど。そういう事だったのか」

「それと、花束の中心に入れた黄色い薔薇<sup>ばら</sup>は『ひよこ』っていう名前がついてるんですよ。ミモザも小さなひよこに見えなくもないし、お話を聞いているうちに、きっと可愛らしいものがお好きなんじゃないかと思って、あの花束をお作りしたんです」

「ほう……花束に、それほどたくさんの意味を込めていたのか」

澄香が説明を終えると、男性は感心したように目を細め唸<sup>うな</sup>った。

「俺の母は、一言で言えば『女傑』だ。『冒険心』とか『忍耐』は理解できる。しかし、『無邪気』  
というのは、どうにも納得いかないな」

「『女傑』ですか。きつと強くて美しい方なんでしょね」

「もちろんだ。彼女ほどのビジネスセンスを持つ女性には会った事がないし、あの年であれだけの  
美貌を保っているのは評価に値する」

おそらく、女社長か何かなのだろうが、男性はよほど自身の母親が自慢であるようだ。

それでいて、実の母に対する他人行儀な言い回しが気になった。

「とにかく、あの母があんな顔をしたのには驚かされた。毎年誕生日には花を贈っているが、あれ  
ほど喜んだ事はいまだかつてなかった」

やや興奮気味にそう語る男性の様子には、喜びが滲み出ている。

「お役に立ててよかったです。喜んでくださったと聞いて、ホッとしました。聞かせてくださって、  
ありがとうございます——あ、これ、よかつたらどうぞぞ！」

澄香は、出来上がったばかりの花束を男性に差し出した。

「それと、これもどうぞ。今日はバレンタインデーですから、来店してくださった男性のお客さま  
全員にプレゼントしているんです」

そう言つて、丸いチョコレートボンボンの入った小袋も差し出す。

ラッピングもそれらしくしようと、透明の袋に入れて、水色とブラウンのリボンで括つてある。

澄香は先端にハートがついたフラワーピックにチョコレートボンボンをくっつけて、花束の真ん

中に刺した。

「ピンク色の花束に、チョコレートか」

「はい。もうじき閉店ですし、せっかく作ったので。ピンク色ですが小さいし、もう夕方ですから  
持っけていてもあまり目立ちませんよ。それと、チョコレートはちゃんとした市販品ですから、安心  
して食べていただけます」

男性限定で数も多くないから、本当は手作りにしたかったが、それを嫌う人もいるし、万が一何  
かあってはいけない。その代わり、品物はそれなりの時間をかけて厳選した。

「ふむ……この真ん中の花は、薔薇か？」

男性が花束を指さして、そう訊ねてきた。

「いえ、これはラナンキュラスと違って、キンポウゲの仲間です。日持ちがするので、おすすめの  
花ですよ。ちなみに花言葉は『飾らない美しさ』です」

「なるほど。これはカーネーションだな？」

別の花を指さし、男性が澄香の顔を窺う。

「はい、そうです」

「これも知ってるぞ。確かスイートピー……」

「当たり前です。よくご存じですね！ では、これもわかりますか？」

澄香が花の周りにあしらったグリーンを掌で示すと、男性は顔を花束にグッと近づけて、それ  
を凝視する。

「これも見た事がある……ちよつと待て、言うなよ。今思い出すから、ぜつたいに言うな」

男性が花束に顔を寄せたまま、目を閉じて眉間に深い皺を寄せた。その表情は、負けず嫌いそのものといった感じだ。

「わかった、ペンペン草だ！ そうだろ？」

いきなりの大声に驚き、澄香は目を丸くして固まる。

澄香は、花束を顔の少し前、目の高さに掲げていた。花束を挟んで、男性の顔は澄香から三センチ足らずの位置にある。

声もそうだが、何より顔の位置が近すぎて見開いた目がチカチカする。

「そ、そうです！ ペンペン草、和名だとナズナ。春の七草でおなじみの越年草です。道端に生えているイメージですが、白くて可憐な花をつけるし、よく見るとふわりとしてロマンチックな雰囲気を持つているんですよ」

「ほお……ペンペン草って、ナズナの事なのか。ただの雑草だと思っていたが、違うんだな」

男性は、さらに花束に顔を近づけてペンペン草に見入っている。

目の前にある彼の鼻筋は、見事なまでにまっすぐだ。顔の輪郭はもちろん、形のいい唇や、目の形、瞳の色、睫毛の長さに至るまで美しい。

澄香は思わず瞬きを忘れて、彼の顔に見惚れた。そして、今さらながらに男性のイケメンぶりに感心する。

「なるほど。覚えておこう」

彼は頷き、ようやく花束から顔を離して、まっすぐ立った。そして、片手で花束を受け取ると、胸元から取り出した薄い冊子を澄香に差し出してくる。

「さつき、店先にいた女性に聞いたんだが、この店はオフィスに飾る花を定期的に持って来てくれるそうだな」

「はい、ご希望に沿った花をお好きな周期でお届けしております」

「では、とりあえず週に一度、ここに花を持って来てくれ」

渡された冊子は、企業パンフレットだった。

表紙には高層ビルの写真が載っており、上のほうに英字で会社名らしきものが記されている。

「花を置くのはエントランスと、社長室だ。建物の雰囲気は、これを見て判断してもらいたい。スタートは来週月曜日。正式な契約はその時に取り交わそう。時間は午前十時頃で。来社したら、受付で秘書課の武田一に連絡を入れてくれ。名刺は、そこに挟んである。では、よろしく」

男性は、一気にそう言うと、くるりと踵を返して入り口へ歩いていく。

澄香は受け取った冊子から顔を上げ、男性に声をかけた。

「ありがとうございますー！ あの、ご予算は、おいくらぐらいのものをご用意したらいいでしょうか」

男性が店の外に出たところで、澄香のほうを振り返った。

「予算の上限はない。わが社のイメージを損ねない、立派で格調高い花を持って来てくれ」

「しよ、承知しました！ 必ず、ご希望どおりの花をお持ちいたします」

澄香が彼を追って店の外に出ると、葉子が入り口のそばで棒立ちになっていた。彼女の足元には、先日男性が連れていた犬がまとわりついている。

「あ、この間のワンちゃんですね。捨て犬とおっしゃってましたが、飼う事にしたんですか？」  
「いや、あくまでも預かっているだけだ」

男性が言うには、拾ったあとすぐに知人経由で保護施設に問い合わせたが、現在手いっぱいであり、空きが出るまで預かってほしいと言われたのだという。

「まったく、ただでさえ忙しいのに、なんで捨て犬の面倒まで見なきゃならないんだ」

彼は文句を言いつつも、店を出るとすぐに犬のほうへ歩み寄った。犬も男性が店の外に出て来たのがわかると、尻尾を振って嬉しそうにしている。

「そうなんですネ。じゃあ、名前はまだ？」

「当然、名無しだ」

男性が葉子からリードの持ち手を受け取ると、犬はうしろ足で立ち上がり、彼の脚にじゃれついていた。

「こちら、行儀良くしなきゃダメだろ」

犬は男性の言う事を聞かず、さらにピョンピョンと跳ねて男性が履いている革靴を爪で引つ掻いている。よく見ると、犬を繋いでいるのは、通常の首輪ではなく着け心地がよさそうな胴輪タイプのハーネスだ。

これだと犬にあまり負担がかからず、快適に散歩させられると、以前大好きな常連客に聞いた事

がある。

(なんだかんだ言って、優しい人なんだな)

よく見ていると、犬は彼が持っている花束についているチョコレートが気になっている様子だ。  
「ワンちゃん、チョコレートを気にしてますね。ふらふらしてるから目につくんだと思います。」  
チョコレートは犬によくないので、食べちゃったほうがいいかもしれません」

犬がチョコレートを食べると、中毒を起こす事がある。

澄香がそれを男性に知らせると、彼は花束を高く持ち上げた。

「そうか。じゃあ、取って食べさせてくれ」

男性は花束を澄香に差し出し、犬を見ながら口を開けた。

「え？ た、食べ……？」

「俺の手は、花束とハーネスで塞がっている」

男性に言われ、澄香はようやく彼が言っている意味を理解した。

急いで花束からピックを抜き、小袋からチョコレートを取り出して男性の口元に差し出す。

「はい、どうぞー！」

すると、彼はいまだじゃれついている犬に視線を残したまま、澄香が持っているチョコレートを口に入れた。

その時、彼の唇が澄香の指をかすめ、わずかな温もりがそこに残った。

それは、ほんの一瞬の出来事だったけれど、澄香の心臓を跳ねさせるのに十分な事件だった。

「うむ……ナツツ入りか。なかなかイケるな」

男性が片方の頬を膨らませながら、もごもごとチョコレートを咀嚼する。

「ほら、行くぞ。帰ったらごはんをやるから、大人しくしろ」

チョコレートを食べ終えた男性が、犬に向かって語りかける。そして、道を歩き出したと思ったら、ふと足を止めて澄香を振り返った。

「ちなみに、ペンペン草の花言葉は？」

男性に問われ、澄香は開けっぱなしになっていた口を閉じた。

「ペツ、ペンペン草の花言葉は——『あなたに私のすべてを捧げます』……です」

そう口にした自分の顔が、みるみる熱く火照ってくるのがわかった。瞬きが多くなり、鼻の穴も若干膨らんでいるような気がする。

「なるほど」

男性は軽く頷いて、口元にうつつすらと笑みを浮かべた。

そして、今度はうしろを振り返る事なく、犬を連れて悠々と道の向こうに歩み去ったのだった。

翌週の月曜日、澄香は依頼されたとおり、男性の会社に花の配達に向かった。目的のビルは「フロリススト・セリザワ」から高速を利用して三十分の距離にある日本有数のビジネス街に建っている。

あの日、受け取つてすぐに小冊子を確認したところ、彼の勤務先が「一条ビルマネジメント」と

いう株式会社である事がわかった。

同社は国内大手不動産会社である「一条コーポレーション」のグループ会社で、オフィスビルや商業施設等の開発や不動産売買のコンサルティングなどを行っている。

従業員数は千人弱。国内に七つの支社を持ち、地上二十九階、地下五階建ての自社ビルのうち、上四階を本社として使用している。

（すごい……すごすぎる。何から何まで、規模が違いすぎる……!）

これまでも何件か、企業へ装花の定期配送をしてきたが、これほどの大企業と関わるのははじめてだ。

まさか、町の小さな花屋がこんな場所に足を踏み入れる事になるとは思わなかった。

しかし引き受けたからには、必ずや満足してもらえる仕事をしようと固く決心する。

（ビビるな、澄香!）

そう自分に気合を入れつつ、ビルが建ち並ぶオフィス街に車を走らせる。はじめて来る場所ではあるが、仕事柄運転ならお手の物だ。

午前九時四十分にはビルの地下駐車場に到着し、車体に店名が書いてあるバンを停めた。

普段、仕事中は黒色のワークエプロンをしているが、配達の時はいしシャツと黒いスラックスに着替えてから届け先に向かうようにしている。

澄香は運転席のドアを開け、外に出る前にルームミラーを覗いた。

いつもは日焼け止めとファンデーションで済ましているメイクも、今日は少し気合を入れてアイ

ライターと色つきリップクリームを上乗せした。もともとあまり化粧映える顔ではないから、これくらいがちょうどいい。

ちよつとだけ乱れていた前髪を整え、運転席から降りて背筋をシャンと伸ばした。

そして、もらった名刺を胸ポケットから取り出し、今一度名前を確認する。

(秘書課の武田主任……)

はじめて来店してくれた時の彼は、一流企業に勤務するにふさわしく知的な印象だった。

二度目はカジュアルな格好だったせいかな、前よりも若干若く見えた。

たぶん、年齢は三十代前半くらい。

(社長室の花を頼んできたって事は、もしかして武田さんって社長秘書なのかな?)

実際のところはよくわからないが、澄香の持つ「秘書」のイメージは、話し言葉や態度が丁寧で、間違ってもスラックスのポケットに手を突っ込んだりしない人だ。

対する彼は、話し方が常に上から目線で命令口調だったし、態度も大きかった。そのせいか、どうも秘書という職業がしっくりこない。しかし、プライベートでの来店だったし、会社では印象が違うのかもしれない。

そうはいつても、別に彼に悪い印象を持っているわけではない。

母親に関する話を聞く中で、実は愛情深い人だという事が窺い知れたし、聞きたい事があつたとはいえ、花束を喜んでくれたとわざわざ報告にくる律義さもある。

それに、仕方なくとはいえ、捨て犬に対してあそこまでしてあげられる人は滅多にいないのでは

ないかと思う。

そんな事を考えているうちに、ふとチョコレートを食べさせてあげた時の彼の顔が思い浮かんだ。あの時、触れた唇の感触は、いまだにはつきりと指先に残っていて、思い出すたびに顔が赤くなる。それに、帰り際に見た彼の顔もしつかり脳裏に焼き付いていた。

今まで多くの男性を接客してきたが、これほど印象に残っているのは武田だけだ。

だからといって、何がどうなるわけでもないし、そんな事実があるというだけなのだが——  
(さ、とりあえず配達!)

車の荷室から花や花瓶などを下ろし、カートに載せて広々とした駐車場を歩く。地下に入る前にビルの外観を確認したが、想像していたより遥かに大きくて立派だった。

周りには桜や松などを配した庭園があり、地下は主要地下鉄の駅に直結している。

(さすが「一条コーポレーション」のグループ会社だなあ)

清潔で広さが十分にある荷物搬入用のエレベーターに乗り、二十六階にある総合受付を訪ねる。受付の女性に要件と秘書課の武田主任の名前を告げると、すぐに作業スタートの許可を得る事ができた。

一応確認したところ、やはり彼は社長秘書だった。

言われてみれば、あのくらいの年齢の男性にしては貫禄があるし、威圧感もあった。一流企業の社長秘書ともなると、ああでなければ社会の荒波を渡っていけないのだろう。

(すごい人に出会っちゃったな)



客として彼が店に来てくれたおかげで、こんな大きな会社の仕事ができる。正式な契約はこれからだ、うまくいけば経済的にかなり余裕ができる。

そうすれば、妹が密かに望んでいる海外留学だつてさせてあげられるかもしれない。

澄香は意気揚々とカートを押してエントランス横に移動し、壁際に作業用の敷物を敷いた。その上に大型の鉢を置き、すでに生けてある花の形を整えていく。

使ったのは、白の百合と薔薇、トルコキキョウなどの淡いブルーの花々だ。鉢にはアイビーなどのグリーンを巻き付けており、幅や奥行きが感じられるよう工夫している。

高さは約百四十センチあり、行き交う人の目を引くの十分なボリュームを持たせた。

できれば現場を下見したかったのだが、時間もなく週末だったため叶わなかった。

しかし、小冊子を見て可能な限りイメージを膨らませ、爽やかでありながら豪華なウエルカムフラワーを演出したつもりだ。

だが、実際のフロアは思っていたよりも天井が高く、開放的な空間になっている。

(これだったら、もう一回り大きなものでもよかったかもしれない)

そんな反省をしながら、澄香は手早く作業を進め、装花の設置を終えた。

その場の片づけを済ませ、再度受付を介して、再び荷物搬入用エレベーターに乗り込んで二十九階の社長室を目指す。

(緊張する……。社長さん、あんまり怖い人じゃないといいけど……)

小冊子には社長の顔写真などは載っておらず、調べようにも澄香はパソコンはおろかスマート

フォンすら満足に使いこなせない機械音痴なのだ。

目指す階に到着すると、眼鏡の男性が澄香を待っていてくれた。

『フロアリスト・セリザワ』さんですね。お待ちしておりました。どうぞこちらへ」

男性は澄香に丁寧な礼をし、掌を上向けて進む方向を示してくれた。いかにも腰が低そうなその人は、武田とはまるで雰囲気が違う。

(この人も秘書かな……。年は私と同じくらい?)

それにしても、出入りの業者相手に、これほど丁寧な対応をする人ははじめてだ。

澄香は恐縮しつつ歩を進め、彼とともに廊下の一番奥にある部屋のドアの前に立った。

「こちらが社長室です。お花を届けたあと、エレベーターホールを右手に行った先の秘書室において願えますか? そちらで、契約書の取り交わしをさせていただきます」

「わかりました。秘書課のどなたをお訪ねすればよいでしょうか?」

澄香が訊ねると、武田は自分の胸に手を当てて、かしこまった。

「私、武田一宛で結構です。すぐに対応できるように、準備万端整えておきますので——」

「え? 武田さんって……」

澄香は、あわてて武田と名乗る人が首から下げているカード型の名札を見た。そこには確かに「武田一」と記されており、本人の顔写真までついている。

もらった名刺に記されていた「秘書課主任 武田一」は、店に来てくれた美丈夫ではなかった? 澄香の混乱をよそに、本物の武田が社長室のドアをノックした。

一呼吸置いたのちにドアを開け、武田が落ち着いた声で中に向かって声をかける。

「社長、『フローリスト・セリザワ』さんが、装花を届けにいらっしやいました」

武田に促され、澄香は部屋の中に一歩足を踏み入れた。

窓際に配されたデスクの前に、こちらに背を向けた姿勢で立っているスーツ姿の男性がいる。

武田が速やかに退出し、一人残された澄香はカートを押して恐る恐る部屋の奥に向かった。そうしながら、社長に向かって声をかける。

「『フローリスト・セリザワ』です。お花をお届けに参りました」

言い終えると同時に、うしろ向きだった社長が澄香を振り返った。

「あっ」

思わず声が出て、あんぐりと口を開けたままその場に立ち尽くす。

そこにいたのは、装花を注文した男性その人だったのだ。

まさか、彼が社長だったなんて――

思ってもみなかった状況に、澄香は嘩然として声も出せずにいる。

「花は、その棚の上に置いてくれ」

彼はデスクのすぐ左側の壁を指さした。そこには、クロームメッキのフレームに白いガラスパネルを組み合わせたデザイン性の高い棚が置かれている。

「は、はいっ」

澄香はカートからアレンジメントを取り上げ、まっすぐ指定された棚に向かった。その際、デス

クの上に置かれたプレートに「一条時生」と記されているのを確認する。

渡されていた小冊子には、社長と数名の役員の名前が載っており、そこには確かに「代表取締役社長 一条時生」とあった。

澄香は自分の勘違いを悟り、心の中でガックリと肩を落とす。

一条を社長秘書だと思い込んでいた澄香は、彼の言動から「一条ビルマネジメント」の社長は、いかに近くて近寄りたがたい年配の男性だと想像していた。そして、自分なりにイメージを膨らませて、今手にしているアレンジメントを作ったのだ。

出来上がったのはバイオレットカラーやトルコキキョウなどの濃い紫を基調としたどっしりとした重みのある品で、まだ若くアクティブな印象の彼には明らかにそぐわない。

「ふうん。ずいぶん渋めのアレンジメントだな」

澄香の背後に立った一条が、ボソリと呟く。

ああ、やっばり――

彼が社長であると知らされていなかったとはいえ、これはさすがにイメージが違いすぎるし、不満に思っても仕方のない出来だ。

澄香は一条を振り返り、深々と頭を下げた。

「すみません！ 来店してくださった方が社長ご本人とは思わず、年配の男性を想像して花を選んでしまいました」

「なるほど。俺が誰だかわかっていなかったんだな。社名がわかっているんだから、社長の名前で

検索をかけたら一発で顔写真がヒットするはずだが？」

「申し訳ありません。あまり機械に詳しくないので……」

言い訳がましく聞こえたらいけないと思い、澄香は口ごもったまま、さらに頭を下げた。

一応、自室にノートパソコンはあるが、まったく触っておらず使い方もよくわからない。そのうち使いこなせるようになりたいと思いつつ、気がつけば数年が経過していた。

「ふーん、機械音痴ってやつか。それじゃあ、時代に乗り遅れるぞ。一体、どんな人物を想定して作ったんだ？ 恰幅がよくてしかつめらしい頑固おやじって感じか？」

そのとおりの事を言われ、澄香は素直に頷いてそれを認めた。

初回からこんな失敗をしてしまうなんて……

これでは、装花契約など結んでもらえないかもしれない。

（こんな事なら、もっと真面目にパソコンを勉強しておけばよかった……）

せっかく、これまでにないチャンスをもたらったのだから、いつも以上にリサーチをしてしかるべきだったのに……

今回の契約が無事締結されれば、生活に余裕ができて妹の海外留学の夢も実現できたかもしれない。しかし、自分のミスでそれもダメになりそうだ。

澄香は覚悟を決めて顔を上げると、一条を見た。しかし彼は、別段怒っている様子もなく、じつとアレンジメントを見つめている。

「今回はこれでいいが、次回からはもっと俺にふさわしい花を選んでくれ。母に贈った花束の時の

ように、俺を喜ばせるアレンジメントを持ってくるんだ」

次回——と言うからには、次があるという事だ。

澄香は俄然やる気を取り戻し、前のめりになって「はい」と返事をした。

「次はきつと、満足していただけのアレンジメントを持つてくるとお約束します！ もしご希望の花がありましたらお聞かせください。その他にも、大きさや色、雰囲気、なんでもいいので希望をおっしゃってください」

次こそは、という固い決意を胸に、澄香はポケットからペンとメモ帳を取り出した。

しかし、彼は鷹揚に首を横に振りながら、澄香の手からそれを取り上げてしまった。

「あ

思ってもみない彼の行動に、澄香はポカンとして棒立ちになる。

「あいにく、俺は忙しくて、ここでいろいろ話している時間はないんだ」

「ああ……はい、承知しました」

なるほど、社長なのだから、それも当たり前だ。

澄香は、手を伸ばしてペンとメモ帳を受け取ろうとした。しかし、一条は取り上げたものを、高く持ち上げて手が届かないようにしてくる。

「ちよっ……あの——」

まるで、小学生の男の子が、ふざけているみたいだ。

澄香は戸惑いつつも、再度ペンとメモ帳に手を伸ばす。すると、一条が愉快そうに笑って、澄香

の手を掴み、掌の上にペンとメモ帳を置いてくれた。

いきなり手を握られた澄香は、驚いて固まる。しかも彼は、澄香の手を握ったまま腰を屈め、顔を覗き込んできた。

「わざわざ君に花を頼むんだから、ぜひとも俺にふさわしいものを持って来てもらいたい。ところで、君の店はいつが定休日だ？」

「も、木曜日です」

「土日は営業しているのか？ 君の他に従業員は先日見た年配の女性だけか？」

「はい。土日も営業していますし、先日お話しさせていただいたのは私の母です。あの店は母が経営者で、従業員は母と私の二人だけです」

「そうか。閉店時刻は、うちと同じ午後六時だったな。では、とりあえず今週の金曜日の午後七時、店に迎えに行くから準備をして待っているように」

それだけ言うと、一条は澄香の手を離し、デスクについてビジネスホンのボタンを押した。そして、秘書の武田を呼び出し、ここへ来て装花契約を進めるよう指示する。

ほどなくしてやって来た武田が、澄香を応接セットに誘導し、契約書を示した。

当初言われていたとおり、花を置くのはエントランスと社長室の二カ所。週に一度の割合で花を生け替え、必要に応じてメンテナンスをする。

（よかった！ これで美咲の海外留学への道が開ける！）

澄香は躍り出しそうになるのを堪えて、心の中でガッツポーズをした。今日は、なんていい日な

のだろう！

ソファに腰かけながら一条のほうを見ると、ちょうどパソコンを開いて仕事を始めようとしているところだった。

聞くなら今だ——澄香は、早口で一条に声をかけた。

「あの、金曜日の準備っていうのは、何の準備でしょうか？」

澄香の問いかけに、彼はパソコンに向けた顔を動かさなのまま、チラリと視線だけを向けてきた。「デートに決まっているだろう？ 俺と二人きりでデートをして、俺自身を深く知ってもらう。そうすれば、俺も君をよく知る事ができるし、一石二鳥だ」

彼はそう言うと、早々にキーを操作し始める。

「……えっ……デ、デート……？」

一瞬間の間違いかと思った。けれど、前の席に座っている武田を見ると、澄香の言葉に反応するように深く頷いている。

「こちらが、社長の名刺です」

武田から一条の名刺を渡され、何かあれば裏面に記されている個人の電話番号かSNSのアカウントに連絡をするよう言われた。

（デ、デートって何？）

再び一条を見るも、彼はすでにビジネスモードに入っており、話しかけられるような雰囲気ではない。

(ちよっ……なんでデート？ 一石二鳥って何？)

一体、何がどうしてそうなるのか。

自分にふさわしい花を用意してもらいたいからといって、いくらなんでも飛躍しすぎだ。

しかし、どんなに一条を窺<sup>うかが</sup>っても、先ほどの言葉を撤回する様子は見られない。

(まさか、本気なの……?)

まったくもって、わけがわからないが、仕事を請け負う側の澄香には断るという選択肢はない。

武田が契約内容について話している間も、澄香の頭の中では「デート」という単語がものすごいスピードでグルグルと回り続けていた。

一方的に一条とのデートが決まった日の夜、澄香は親友の土田<sup>つちだ</sup>春奈と近所のファミリレストランで食事をしながら話し込んでいた。

「それって、めちゃくちゃ玉の輿<sup>こし</sup>に乗れるコースじゃないの！ チャンスだよ、澄香！」

澄香が一連の出来事を話し終えるなり、春奈が興奮気味に椅子から腰を浮かせた。彼女は話を聞きながらスマートフォンで一条の画像を検索し、その美男ぶりに度肝を抜かれた様子だ。

春奈が見せてくれた彼に関する記事によれば、一条は今年三十歳になったばかり。幼少の頃から優秀で、成績は常にトップクラス。生まれながらのビジネスセンスを持ち、就任以来、自社の売上高を伸ばし、純利益を二倍以上に膨らませた実績を持つという。どうやら彼は、容姿端麗だけでなく、超一流のビジネスパーソンであるらしい。

「こんなハイスペックなイケメン、ぜったいに逃がしちゃダメだからね！ 何がなんでも捕まえて結婚に持ち込まなきゃ。そうすれば、待っているのは夢のセレブ生活だよ〜」

春奈が掌<sup>てのひら</sup>をひらひらさせながら、うっとりとした表情を浮かべた。彼女とは幼稚園からの仲であり、お互いになんでも話せる良き理解者でもある。そんな春奈は、現在付き合って二年目の彼氏と結婚準備中だ。

「玉の輿<sup>こし</sup>って……そんなんじゃないんだって。デートって言っても、あくまでも満足してもらえるアレンジメントを作れるよう、社長本人をよく知るためのもので——」

「だって、社長自ら『デート』って言ったんでしょ？ デ、エ、ト！ もしかして、いきなり盛り上がり朝までコースになったりして！ おばさんには言っているの？ なんなら、うちに泊まるって事にしておこうか？」

「春奈ったら……なんで、いきなりそこまで話が飛躍するの？ これは『デート』という名の仕事なの。うまくいけば、美咲を留学させてあげられるし、家計的にも大助かりなのよ。間違っても契約を解除されないように、できるだけ社長を観察したり話したりして、少しでもたくさん情報を得てこないと」

契約を結んだとはいえ、一条の判断でいつでも解約できる内容になっているのだ。

「そりゃそうだろうけど、せっかく出会ったんだよ？ とりあえず、頑張ってみようよ。待ち合わせが午後七時なら、準備も手伝えるよ。私とサイズが同じだから、デートの洋服を貸してあげられるし、髪の毛もおしゃれにしてあげる」

歯科衛生士の春奈は澄香と同じく木曜日が休みだが、診療は午後五時で終了するのだ。

「ありがたい。だけど、どう考えても現実的じゃないって。ものすごいイケメンなのは認めるけど、いかにも女性慣れしてそうだし、必要以上に親しくならないほうがいいと思う」

「まあ、これだけの人だから、ものすごくモテるだろうね」

「でしょ？ そんな人が私なんかを相手にすると思う？ それに、私が付き合うなら結婚前提じゃないと嫌だって知ってるでしょ？ 遊ばれてボーイとか、ぜったいにごめんだし。だったら、最初から何も期待しないほうがいいよ」

昔から堅実派の澄香は、軽い気持ちで男性と付き合うという考えがそもそももない。当然相手は、堅実で誠実な人が望ましいし、もし縁あって結婚する事になったら、平穩で安定した生活を送りたいと思う。

「澄香の考えは知ってるけど、たまには冒険してみるのもいいと思うよ？ だって、相手は恋愛に長けたイケメンだよ。スポーツする時だって、事前に準備運動をするでしょ？ このデートは、澄香がこの先、本気で恋愛をする時のための、いい練習になるんじゃないかって思うんだよ」

「練習って……。お互いに好きでもない相手と、何をどう練習するのよ」

「だから、そう硬く考えなくてもいいんだって。彼氏がいるわけでもないし、ただデートして、社長と楽しい時間を過ごせばいいの。それに、仕事の一環って言っても、せっかくなら楽しまなきゃ損だし、自然体でないと社長の人となりだってわからないよ」

言われてみれば、そうかもしれない。せっかく時間をとってもらうのだから、きちんと成果を出

さなければ申し訳ない。

「そっか、そうだね」

「そうそう、そのついでに恋愛の練習をさせてもらうって感じで」

「……その、恋愛の練習ってやつ、必要かな？」

「必要だよ！ 仕事も大事だけど、私生活だって重要だよ。何事にも練習や下準備は必要だもんね。なんにせよ、デートに関しては社長に任せておけば大丈夫。それに、私、社長って、ぜったいにいい人だと思う」

犬好きで自身もトイプードルを飼っている春奈が、そう断言する。

「だって、捨て犬を保護して何カ月も世話してるんだよ？ ワンちゃんも社長に懐いてたんでしょ？ 犬を信じなさい。彼が優しい人であるのは、間違いないわよ」

「確かに。そのワンちゃん、社長がそばにいくと、嬉しそうにじやれてピョンピョン飛んだりして。社長のほうも、ワンちゃんにかけ言葉はぞんざいでそっけないんだけど、接し方やワンちゃんを見る目が優しいんだよね」

「ほーらね。ワンちゃんも社長に出会えてラッキーだったよ。澄香だって、そう。とにかく、金曜日は目一杯おしやれして行かなきゃ。せっかく誘ってくれたんだし、それなりの服装をしていかないと失礼でしょ？」

なるほど、相手は有名企業の社長であり、どこに行くにせよカジュアルな装いは避けたほうがよさそうだ。

「わかった。じゃあ、協力をお願いしようかな」  
「任せといて。あ、なんだかウキウキしてきた〜！」  
やけにハイテンションの春奈に、澄香は困惑する。けれど、これも「フローリスト・セリザワ」や家族のため——そう思つて、金曜日のデートに備えようと決心するのだった。



一条時生は、仕事上多くの物件に接する事もあり、「一条ビルマネジメント」に入社以来、一、二年という短いスパンで引越しを繰り返してきた。

現在住んでいるのは地上三十二階、地下三階建てのタワーマンションで、時生はその最上階のペントハウスで一人暮らしをしている。設計施工ともに「一条コーポレーション」が行ったその建物は、築十二年、専有面積は約二百五十平方メートルの2LDKで、賃借料は毎月二百万円強。一階には二十四時間体制のコンシェルジュが常駐しており、中層階には住人専用のフィットネスルームやラウンジも完備している。

職場までは車で二十分弱で行けるし、実家は十五分の距離だ。

ここに引越して今年で二年目になるが、眺望は極めて良好だし、どこへ行くにも利便がよく、今のところ転居の予定はない。

唯一難点を上げるなら、大学時代からの悪友が徒歩五分の距離に住んでおり、しょっちゅうここ

に入り浸<sup>ひた</sup>つては部屋を散らかしていく事くらいだ。

(そういえば、あの花屋もここから近かったな)

時生は、母に花束を贈った時の事を思い出す。毎年恒例の、ただ渡すだけの儀礼的なやり取りのはずが、今年は母の反応がまるで違った。

時生の母、一条貴子<sup>たかこ</sup>は現在五十五歳。

一条家の直系尊属にして、「一条コーポレーション」の代表取締役社長で、夫であり時生の父親である一条清志<sup>きよし</sup>を副社長として従えている女傑だ。

昔から仕事第一で滅多に笑う事などない彼女が、「フローリスト・セリザワ」で作ってもらった花束を手にした途端、目尻を下げて満面の笑みを浮かべた。

それだけでも十分驚くに値するのに、花束を見つめながら「可愛い」と呟いて「ありがとう」と言ってくれた。

もちろん、毎年花束のお礼を言われていたが、いかにも取ってつけたような感じのものだった。それなのに、今年に限つてはいつまでも両手に抱えたまま花を愛<sup>め</sup>で、ついにはお気に入りの花器を用意させて自ら生けていたのだ。

今年渡した花束は豪華とはほど遠く、言ってみれば、作った本人と同じく、特別秀<sup>ひいで</sup>た感じはしなかったのだが……

「いろいろと意味が込められていたにせよ、一体、あの花束の何がそんなに良かったんだ？」

時生は、窓から見える煌<sup>きら</sup>びやかな夜景を眺めながら、独り言を言う。

あの日、母の誕生日用の花束を買いに行く途中、たまたま「フローリスト・セリザワ」の前を通りかかった。信号に引っかかり、なんの気なしに店のほうを見ると、花屋の店先で、大口を開けて笑っているエプロン姿の女性が目に入った。

店を見るからに町の花屋といったごちんまりとした感じだったし、女性もどこにでもいる普通の容姿だ。普段の自分なら、そんな店に立ち寄りたりしないし、花束を買う店も別的高级店を予定していた。

それなのに、気がつけば「フローリスト・セリザワ」で花束を依頼しており、店にいた女性に聞かれるまま、自身の母親について話していたのだ。

今考えてみても、なぜ話す気になったのかわからないし、気まぐれとしか言いようがない。強いて理由を上げるならば、彼女の笑顔に引き寄せられたとでも言うべきか。

（芹澤澄香か……。少々おせっかいだし、顔もスタイルも普通。だが、対応は丁寧で礼儀正しいし、からかい甲斐があつて面白い。それに、妙に惹かれる……。実に不可思議な女性だ）

芹澤澄香は、自分にとつて目新しい事この上ない。だが、いくら知らなかったとはいえ、誰に向かってあんな自己中心的ともいえる誘導をしたと思っているのだ。

これまで生きてきた中で、時生は親族以外に意見される事などまづなかった。

それなのに、彼女は花束を依頼した時、こちらの要望をストレートに受け取らず、最終的に自分の思い通りのものを作り、それを時生に受け取らせたのだ。

はつきりとした言葉ではなかったが、時生は結果的に彼女の言葉に誘導され、思っていたのとは違う花束を持って母を訪ねたのだった。

もちろん、いい結果を得られたのだから、彼女には感謝している。それでも、やはりちょっと気に入らない。

まさかとは思うが、ああ見えて男を手玉に取るタイプの女性なのだろうか？

（いや、あの反応からして、男慣れしていないと判断するのが妥当だろうな）

彼女は、ほんの少し指に唇が触れたり、手を握ったりただで固まって赤面していた。

いずれにせよ、あれほどわかりやすい反応を見せる女性に会ったのははじめてだ。

時生の知る女性は皆、手練手管に長けており、嘘の涙を見せたり過剰に媚びたりする事はあつても、こちらの行動に素直に顔を赤くするような者など一人もない。

それもそのはずで、これまで自分に近づいてきた女性は、全員が一条家のステータスを目当てにしていた。それはまあ、よしとしよう。

自分だって、一定以上の家柄や容姿などを重視して女性を選んでいるのだから、お互いさまと言えなくもない。

時生は将来的に一条グループのトップに立ち、各会社の未来を担う立場になる身だ。つまり、今後も一条家を繁栄させるべく、結婚をして子孫を残す義務を背負っている。

そのため、これまで女性とはそれを目的として付き合ひ、その都度、義務を果たすにふさわしいかどうかを判断してきた。



当然、恋愛感情など二の次である。由緒正しい一族に生まれたのだから、当たり前前の事だと思われ、それについて異論はない。

しかし、長く生活をともにし、子を成す相手だ。性格はもとより、身体の相性も良くなければその気にはなれない。

結果、今に至るまで妻として、ともに一家を盛り立てていける女性は見つからず、独身生活を継続している。

言うまでもなく、芹澤澄香は伴侶としては家柄、容姿ともに候補にも挙がらない女性だ。

ただ、彼女との短い交流の中で、その性格を好ましく感じた。

提示した要望を素直に実行しないのは問題だが、きちんと結果を出したのは見事だし評価に値する。彼女の相手をするのは愉快そうだし、彼女の手からチョコレートを食べた時、ふと唇を奪ってやりたい衝動に駆られた。

ほぼ初対面の、伴侶候補にもならない相手とデートをする気になったのは、そんな感情を持った自分を新鮮に感じたからだろう。

何より、一体なぜ、彼女の作った花束があればほど母を喜ばせたのか——ぜひとも、その要因を探る必要がある。

(何はともあれ、まずは近くで、彼女と接してみる事だ)

それには、当然身体の相性も含まれていた。

もちろん、相手の意向を無視して関係を持つつもりはないが、自他ともに認める超絶モテ男たる

自分だ。

男慣れしていない女性を落とすのは、赤子の手をひねるよりも簡単だろう。

花嫁候補にはならないが、たまには結婚とは関係なく女性と深い関係になるのも悪くない。

そんな事を考えながら窓辺でワイングラスを傾けていると、左の足先に柔らかな温もりを感じた。見ると、足元に犬がいる。

「なんだ、お前か」

この犬と出会ったのは、今から数カ月前。悪友に誘われて食事に行った時の事だ。

帰りがけに車を取りに一人駐車場に向かっていると、劇場横の路地で蹲うつすまっているこいつを見つけた。

かなり汚れていて、見るからに弱っていた。

それでも「おい」と声をかけると、顔を上げて「クウン」と鳴いて、尻尾しつぽを振ってきた。

放っておけば間違いなく命を落とすだろう——そう判断するなり、なぜかそのまま放置する事ができなくなった。

幸い、近くに動物病院がある事を知っていたから、すぐにそこに連れて行って診てもらったところ、ジステンパーウイルスに感染していた。このウイルスは、伝染率と致死率が高く、消化器や呼吸器の他、目や皮膚、神経系の問題を引き起こすものだ。

そのまま入院加療させたが、うしろ足が動き辛いという後遺症が残った。

保護施設を訪ねたが、里親が見つかるまで預かってほしいと言われ、かれこれもう百日近く同居

している。

いずれは手放す予定の犬だ。そのため、名前もつけないで「おい」とか「お前」とか呼んでいるが、一時的にでも呼び名をつけたほうがいいだろうか？

「やっぱり、名前がほしいか？ お前、どう思う？」

犬に訊ねると、機嫌よさそうに尻尾を振って足の周りをクルクルと回り始めた。

『犬って人を見ますから、きつとお客さまが優しい人だってわかったんでしようね』

そう言っつて、上目遣いにこちらを見た時の彼女は、犬と甲乙つけがたいほど愛嬌があった。

犬も芹澤澄香も、どちらも可愛げがある。

デート中、一体どんな反応を見せてくれるのやら……

それを思うと、かなり楽しみだし、せっかくだから十分に楽しませてやろうと思う。

「ふっ……名前、何がいいかな」

時生は膝を折ってその場に屈み込むと、優しく犬の頭を撫でてやるのだった。



やってきた、デート当日。

澄香は仕事を終わるとすぐに自転車で七分の距離にある春奈の家に向かった。待つてましたばかりに自室に迎え入れられ、鏡の前に座らされる。

一応、自力でコーディネートした服を着て行つたけれど「地味すぎる」と、春奈に一蹴されてしまった。

「ちよつと、これ着てみて」

彼女が用意してくれていたのは、ふわふわとした白いニットのトップスに、黒のレーススカートを合わせた、ちよつとフォーマルな印象の組み合わせだった。それにライトグレーのチェスターコートとチェック柄のストールが加わる。

「ちよつとガーリッシュすぎない？」

普段これほど甘いテイストの洋服を着る機会なんかなかった。

澄香は鏡に映る自分自身を眺め、首を傾げる。

「ううん、似合ってる！ バッチリだよ、澄香！」

「そ、そう？」

春奈に太鼓判を押され、ちよつとだけ安心する。

続いて、顔にナチュラルなピンク系のメイクを施され、髪の毛は丁寧に梳かして毛先を軽く巻かれた。

結局黒のパンプス以外は、すべて春奈のものを借りて待ち合わせ場所に向かう。

一条からは店に迎えに来ると言われていたが、前日にSNSで連絡を入れ、春奈の自宅近くの公園を待ち合わせ場所にさせてもらった。

理由は、準備を春奈の家とする予定だったのと、母にデートの件を言えなかったためだ。